

2011,10,22

湘南藤沢学会 「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」

大学ボランティアセンターによるプログラムの評価研究会報告

博士課程 2年 市川享子

1. 研究の目的

大学ボランティアセンターがおこなうサービスラーニングプログラムラムの実施が学生や大学、地域社会に及ぼすアウトカム（結果）、インパクト（短期的・長期的）について、プログラム評価（P.H.Rossiが開発）手法を用いて明らかにする。今回は、全国の大学ボランティアセンター並びにサービスラーニングセンター関係者が集まる研究会にて、これまで申請者らが進めてきた「地域密着型ボランティア学習プログラム」の評価手法とその結果（経過）を発表し、さらに、アウトカム（大学、地域社会に与える結果）についても、さらに議論を進める。

2. 研究の内容

申請者らが、プログラム評価研究の第一人者（東京学芸大学福井里江先生：「プログラム評価の理論と方法」 P.H.Rossi の翻訳者）とともに進める、サービスラーニングプログラム（学生による地域貢献と学びを融合したプログラム）の評価手法についての研究である。申請者らは、2010年度より大学近隣地域と協働したサービスラーニングプログラム「とつかプロジェクト」を実施し、その評価手法の開発・研究に取り組んできた。昨年度は、プログラムが学生、大学、地域社会に与える結果（アウトカム）や短期的・長期的な影響（インパクト）を洗い出すワークショップやプロセス評価を実施、検討してきた。今年度は、これまでの研究のレビューをおこない、広く研究者、実践者に対して発表・還元する場を設けるとともに（第1回）、さらに、本研究のゴールの一つであるアウトカム評価の方法についても検討した。（第2回）

3. 研究会の成果と課題

成果としては、下記の4点を挙げたい。

第1に大学ボランティアセンターの研究や実践に関わる全国からの参加者とともに、これまでのサービスラーニングにおけるプログラム評価研究の到達点について、報告及び議論ができたことである。本研究会の目的は研究者だけの議論に留まらず、研究の成果をサービスラーニングの現場に還元していくことであった。そうした意味では、本研究会を通して、サービスラーニングプログラムの評価の意義を広く実践者と共有できことは意義深いと考える。

第2にプログラムの実施及び評価におけるキーパーソンである、学生や地域における協働のパートナーも加わりながら、研究会が開催できたことである。こうした取り

組みを通して、ステークホルダーの評価に対する積極的な関心や態度を育てることができた。今後はこうした共通の問題意識をもとに、ステークホルダーとともに質問紙作成に取り組みたい。

第3に本研究会参加メンバーより、「大学ボランティアセンター間で共通の質問調査紙を作成することによりより質の高い、さらに汎用性の高い質問紙が作成できるのではないか」という提案も出された。今後は大学ボランティアセンター間の協働で進めている強みを生かし、共通の質問紙作成等を踏まえた共同研究として発展するステップとなる、重要な研究の場であった。

第4に、研究会メンバーとそれ以外のサービスラーニング研究者による共同研究のメリットを生かし、アメリカのサービスラーニングの研究者らが作成した、“**Assessing Service-Learning and Civic Engagement**” **Campus Compact,2011**,の翻訳にも着手しはじめている。こうした取り組みは、本研究会を通して問題意識の深まりの成果だと考える。今後、さらに日米のサービスラーニングの実践と研究をつなぎながらも、日本の大学におけるサービスラーニング評価手法の発展に貢献することも、本研究会の使命と考える。

課題としては、本研究の成果をもとにした、プログラム評価の実施である。申請者らは、10月より、“**Assessing Service-Learning and Civic Engagement**” **Campus Compact,2011**,作成のアセスメントシートの翻訳とそれをもとにした、プログラム参加者（学生）に対する評価の実施に取り組んでいる。こうした研究を進めながら、プログラムの評価と検証についても、さらに取り組んでいきたいと考えている。